

## 「災害時応援協定」

同窓会長 伊東尚志  
(上市町長)

上市高校同窓会会員の皆様におかれましては、益々のご清福にて、ご活躍のこととお慶び申し上げます。

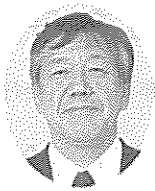
日頃から当会の運営、活動に温かいご支援ご協力いただき、心より感謝申し上げます。

さて、上市町では学校をはじめとする公共施設の耐震化にいち早く取り組んでおり、災害に強い安全な街づくりに向け努力しているところです。

また、災害発生時における救護・人的・物的支援に関わる「災害時相互応援協定」についてこれまでに約30団体の民間事業者や各種団体と締結させていただいておりますが、この度、石川県中能登町、埼玉県滑川町と自治

体間で締結させていただくべく進めているところであります。その他の自治体とも締結について検討しているところがございます。この協定は相互に復旧支援及び協力が円滑にかつ迅速に行われることにより、被害の軽減と住民生活の安定化が期待されるものであります。

最後になりますが、同窓会員の皆様には母校の町である上市町の安心・安全なまちづくりの推進にご理解とご協力をお願いするとともに上市高校の益々の発展と会員の皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げ、あいさついたします。



## ご挨拶

副校長 高安敏男

この4月より、本校に勤務しております。上市という地は、少しばかり縁があって、私の妻の祖母が、以前熊野町で飲食店を開いておりました。お盆の8月13日に祖母の家を訪ね、上市川河川敷の花火大会を子どもたちはとても楽しみにしていました。御祭霊（おしょうらい）の炎、くみ上げられた竹と藁（におとんぼ）が燃え上がり、その竹の破裂する音、火薬のにおい。そして商店街の夜店の裸電球。幻想的な雰囲気は今も心に残っています。また、初任校でたいへんお世話になった校長先生が上市町在住の方であったことなどを思うと、見えない力が私の最後の勤務校をこの上市高校に定めてくれたのかなあという気持ちになります。6月の中頃、熊野町に住

んでいる親戚の法事で集まる機会がありました。そのときに、今年から本校に勤務していることを話したところ、何人もの年輩の方から「私も上高出身です。学校を盛り上げて下さい。」といわれ、その責任の重さを感じるとともに、現在通っている生徒も、上市の町中を通るときに、多くの同窓生の方から関心をもって見ていただいていることを実感いたしました。

私は、毎日学校の正面玄関に掲げてある校訓額を見上げ、そこに書いてある3つの言葉「勤労、自治、向上」の意味するところを考えながら、校舎に入るようにしています。創立当時とは、学校をとりまく状況も大きく異なっていますが、働いて社会に貢献しようとする高い志。自ら進んで自らを治めようとする自治の心。「勤労・自治」の心を持って、地域の文化を向上させようとする気概。そのすべてが、現在設置されている総合学科にもつながっているものと思います。

会員の皆様には、母校に対する変わらぬご支援をお願いするとともに、ご健勝と今後ますますのご活躍を祈念申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。



## 総会を間近に控えて

教諭 藤 樫 幸 博

私が、再び母校の教壇に立ったのは、4年前の創立90周年の年でした。折しも、秋に実施される90周年式典の準備などで、連日教職員は、忙しそうでした。私は、同窓生の教員として、いろいろな小委員会に顔を出していました。しかしながら、なにぶん、転勤して来たばかりで、右往左往しておりました。多くの教職員が、3年前より練り上げられた校史の編纂や式典来場者の取りまとめに追われる中で、私は、封書の発送や印刷物の製本などが主な仕事でした。それでも、多くの先生方や諸先輩方の努力の積み重ねで、90周年記念式典も成功裏に幕を閉じることができた日は、感慨深いものでした。

今から遡ること24年前の創立70周年が、私が初めて、教職員に仲間入りした年のことでした。その当時、上市高校の教職員は100名弱（現在43名）で、その内、本校同窓生の教職員は、約15名程在籍しており、その内訳は、農業科教員が約10名と普通科教員が5名程でした。他校の卒業生の教員が55名程で、その他、講師の職員や事務の方々を合わせると約100名弱です。こんなにも、教員数が多いのは第2次ベビーブームで、全校の生徒数が千人（現在464名）を超えており、大所帯の学校だったからです。

さて、年に1度の定期総会では、卒業10年組、20年組、30年組、40年組、50年組の集いが執り行なわれていました。総会の会場には、各組より、20名程度参加し、毎年100名以上の参加がありました。そのお世話を同窓生の教職員で行ってまいりました。

ここで、自分が担当した「卒業50年組の集い」が行われた一日についてご紹介いたします。18歳で高校を卒業し、50年後の方々なので、67歳と68歳の方が対象となります。母校に早朝集合して頂き、校舎や農場を見学した後、バスで丸山農場へ行きました。その頃まだ、飼育していた牛の放牧風景を見ながら、今朝絞った牛乳を味わってもらい

ました。多くの方が、ここでの開墾談義を交わされ、鉾やスコップで木の切り株を掘り起こしたことや高校生として活躍していた頃の話題で盛り上がっておりました。その後、バスで、最後の研修地である「眼目寺」で物故者を弔いお経を挙げて頂きました。自分が参加した頃は、物故者の方が10名程度で、少々多いかなと思っていましたが、平成5年頃には、物故者が半数以上の20数名を数えていました。戦時中に練り上げ卒業で、すぐに職場へ向かった人々も同級生にはいたそうです。余談ですが、自分の父もこの年50年組で卒業して1年後に召集され、金沢市内の飛行士養成機関で研修中に終戦を向かえた為、職場へは行かなかったとのことでした。父が職場へ行っていたら自分がいなかったのではと思うこともあります。

また、父の同級生の方が綴った50年組記念誌「ポプラ並木」には、そんな戦争の足跡が色濃く残っていました。一説を引用させて頂くと「国防色の学生服」や「広大な太平洋上で敵飛行機、敵艦艇の猛攻撃に耐えて、よく生き残ったものと生命の不思議を感じた」などの戦争体験談がありました。また、丸山農場の開墾作業の一説では、「夏の暑いさ中、地下足袋にゲートルを巻き、上半身裸体で、開墾鉾を振るい、汗と土埃りにまみれて働いた光景が今も懐かしい思い出である。」とあり、過ぎ去った昔の思い出の場所、丸山農場は、高校生活の代名詞となっていたと思われます。自分も、高校生の頃や教員として戻ってきてから丸山農場には幾度と無く、足を運びたくさんの思い出を持つことができました。特に牛の出産風景は、貴重で感動的な体験で、生徒と共に歓声を上げていました。

このような体験を持つ事ができるのも、開墾作業で額に汗して、頑張ってもらった諸先輩方や多くの先生方のお陰だと感謝しております。母校の上市高校総合学科で学ぶ生徒の皆さん一人一人に命の大切さや、命を育む感動的体験を味わってもらうことが、私の母校への恩返しになると思っています。1年生160名全員でのサツマイモ栽培やグリーン分野での農業体験など機会あるごとにこのことを伝えていきたいと思っています。そして、母校の後輩が命の大切さを理解し、諸先輩方の業績を語り継ぐことで、感謝の気持ちを持てるようになって欲しい願っています。